

—ぼくらはかく祈りかく意志する—

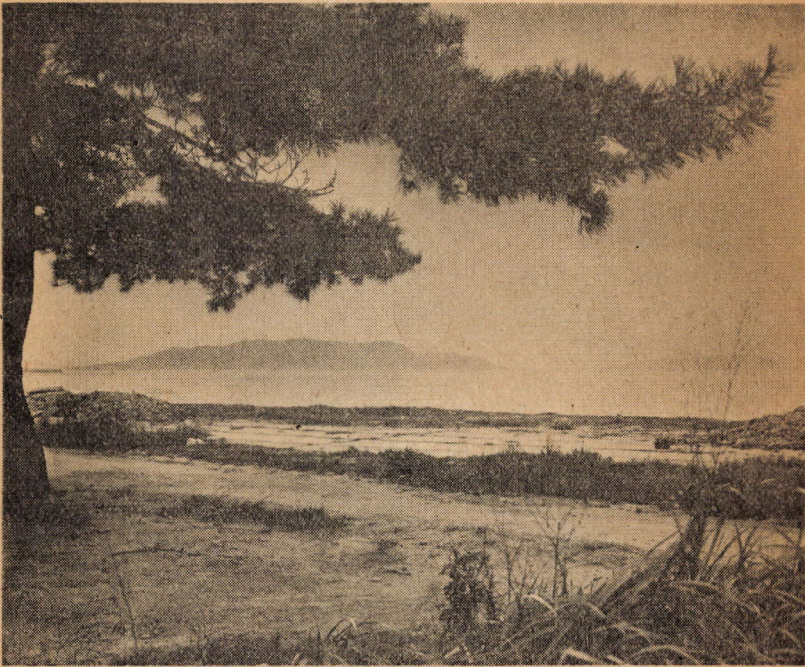
民族自立のために



国民文化研究会

第二回全九州学生青年合宿研修会報告

—第二回全九州学生青年合宿研修会報告—



(百道海岸より能古島・志賀島を望む)

国民文化研究会



(合宿参加全員)

— 戦死した友と未だ見ぬ子孫にこの書をさくづける —

国民文化研究会

第二回全九州学生青年合宿研修会報告

民族自立のため

—ぼくらはかく祈りかく意志する—

国民文化研究会

目次

民族復興の根底を培うもの……………川井修治……………1

合宿報告

一、合宿に至る経過……………6

二、合宿人員の構成……………11

三、合宿経過報告……………11

第一日……………11

午前 集合 班別編成

開 会 式——挨拶 瀬上安正

午後 全員自己紹介

「現代日本の盲点」……………笠岡商業高校教諭 名越 二荒之助
「現代思想の根本課題」……………鹿児島大学助教授 川 井 修 治

全体討論

夜 班別討論

第二日……………17

午前 「歴史観の諸問題—マルクス主義の超克」……………立正大学教授 浅 野 晃

全体討論

午後 「世界経済の基本的動向」……………アジア大学教授 伊 部 政 一

「日本経済の特質と経済計画の方法」……………高崎経済大学教授 石 村 暢五郎

全体討論

夜 各講師別討論、班別討論

第三日……………24

午前 「日本文化の位置」……………東京大学講師 竹 山 道 雄

全体討論

午後 「本合宿の感想」……………小田村 寅二郎

全体討論

「現代哲学の窮極の問題」……………日本大学教授 高山岩男

全体討論

夜 班別討論

全員コンパ

第四日……………

午前 「日本文化の源流——聖徳太子の信仰思想を中心として」

……………労働科学研究所 高木尚一

「日本文化の血脈」……………千葉高校教諭 南波恕一

全体発言

午後 閉会式——挨拶 宝辺正久

合宿感想録……………

合宿参加の悦び……………下関市日新中学校教諭……………岡崎博友

生涯の指針として……………熊本大学 三年……………S

直感のままに……………福岡大学 二年……………I

厚い壁の前で……………おたふくわた株式会社勤務……………渋田重雄

合宿で得たもの……………若松高校三年……………N
 合宿を終えて……………鹿児島大学二年……………N

参加者よりの手紙……………

八代市松高小学校教諭……………久住 明
 福 岡 県……………吉田春乃
 福 岡 県……………国武万春生
 長崎大学一年……………T

参加学生、青年に訴う……………

会 員……………小林国男
 ……末次祐司
 ……宝辺正久

(表紙……………江上龍介)

民族復興の根底を培うもの

—— 第二回全九州学生・青年合宿研修会を終えて ——

川 井 修 治

去る八月二十日より四日間、私達は福岡市百道海岸の社会教育会館に於いて、第二回全九州学生・青年合宿研修会を挙行いたしました。今ここにその合宿記録を刊行するに当り、私達がこの運動を始めました趣意、合宿の持つ意義、将来に対する私達の念願と展望等について聊か思う処を申し述べ、参加者諸兄の志を励ますと共に、江湖の御支援に対してお答えいたしたいと思います。

私達の念願する窮極の目標は、真の意味での日本民族の自立であり、正しい意味でのその復興であります。これこそは、過ぐる日の敗戦に悲涙を呑んだすべての国民同胞の共通の願いであり、祖先とそして又子孫に対して我々が負うている至上の課題と云うべきであります。それがためには、凡ゆる政策の立案や制度の改廃の大前提として、何よりも先づ現前する国民思想の分裂と頹廢を克服し、緊密なる国民共同体の精神的基盤を形成しなくてはなりません。そして就中次代を背負う青年・学生層の中に、祖国の伝統に対する素直な情感を喚び起し、精確なる学問と健全な良識を身につけさせ、自分の持てる力を国家国民生活の正しい建設のために捧げようとする氣風を、自らの内発的自覚の上に振り起させることが肝要であります。このことがなされないならば、いかに物質生活が整い知識のレベルが高まつたとしても、嘗つての大ローマが正に経済的致富と文化的爛熟のさ中に枯死した如く、民族本然の若々しい生命力は根元を断ち切れ、やがては内的崩壊の途を辿るや必至であります。

このような民族復興の根底を培う仕事は、今の日本にとつて焦眉の急を要するものであることは、誰しもが知る如くであります。敢えて岸首相の演説を引き合いに出すまでもなく、国民の道義の確立を願ひ、青年の愛国心の喚起を要望する声は、巷に満ち満ちしていると云つても過言ではありませんまい。しかるにそのために實際なされていることと云えば、学校制度をいじつたり奨学金を増したり、スポーツやレクリエーションに力瘤を入れたり、或いは又既成の青年団体や社会教育機関の活動を促進する、といった風な余りにも外面的な事柄に止まつている感じが覆うべくもない現状であります。勿論、私達はこうした外面的施策が全然無意味であるなどとは思いません。しかしながら、もつと根本的な事柄、即ち直接に若い青年達の心魂に喰ひ入つて、これを内奥から揺り動かすという心と心の接觸が行われるのでなければ、云う所の道義も愛国心も上滑りに流れ、所詮は単なる掛声や政治的身振りに終つてしまうことを危懼せざるを得ないのであります。蓋し、意志は意志によつてのみ喚び起され、精神の改革は精神によつてのみ達成され得るからであります。

とは云え、この民族復興の根底を培う仕事は極めて困難なものであることは、今更贅言を要しません。今の青年達には日本の伝統と云えば、封建的遺制とか軍国主義とかいう概念しか頭に浮かんで来ないのが実情であります。民主主義を合言葉のように振り廻すことは知つてはいるけれども、その内実は一向に消化化されておらず、つきつめた処は我見の固執、得手勝手な権利の主張以外の何物でもありません。高貴な精神や深奥な教えによつて身を律することを束縛として放下し、露骨な官能的唯物的自我の野放図な発散しか考えない、といったタイプが一般のようであります。このように自己自身の在り方に対する謙虚な省察と慎思とを欠く処から、凡ゆる社会事象に対し、自分をその場に入して考えようとせず、単に外在的傍観的に眺めるといふ人文・社会系統の学問にとつて致命的な研究方法上の誤謬が生じて参ります。資本主義とか社会主義とかいふ抽象概念を操作することにのみ熱中して、自分が本質的に日本国民として生を享けているという事実認識がこれに伴わないのであります。こうした論理のつぎはぎが学問である、と

日々教えられている青年達が、畢竟国民生活を厭離し呪咀し、果てはこれを破壊し否定することによつて人間の幸福が齎らされるといふ考え方に靡いて行くのは、蓋し必然の徑路であります。こういう青年達と相對して道を説くことが殆んど不可能事のように思われるのも、あなたがち無理からぬ処でありましょう。

しかし私達は自分自身の経験から、それが可能であることを確信しております。日本の青年達が上記のような混沌に陥つてゐるのは、決して青年自体の罪ではありません。その責を主として負うべきものは、現代日本の表面を覆つてゐる浮薄乱脈極まる思潮、特に現今ジャーナリズムを支配してゐる所謂進歩主義者達であります。彼等こそは片々たる空理に捉われて嚴肅な現実精神を忘却し、意識的、無意識的に赤色革命の温床を育くみつつある現代のソフィストであります。それ故、一度学問研究方法を根底から正し、色眼鏡を脱したデータを取りそろえて、かかる進歩主義者の冗舌に侵された汚毒の表皮を切開するならば、その下には若き民族の清純な血脈が力強く搏動してゐることが知られるのであります。過去幾度かの、そして又この度の合宿研修会に於いて、私達が確認したのは正しくこの事実でありました。私達を鼓舞し前途の光明を感じさせてくれているものは、かかる民族の血脈がなべての青年達の心に底流として潜みつつも不断に流れてゐること、而も昨今の騒然たる内外の状勢に鑑みて、それが今や鬱然たる胎動期を迎えつつある、という実感に他なりません。問題はだから、今こそかかる底流を明確な意識の上に浮びあがらせ、学問的体系を整え運動の組織を固め、自らの力を信じて奮い立つことであります。これができたならば、最近特に世人の指弾を受けつつある全学連や総評等の動きは、その土台を一角より掘り崩されて、必らずや自壊に至ると信ずるものであります。

この度の合宿研修会も、もとよりこのような基本的意図を秘めつつ行われたものであります。その経過については別稿で詳細に触れられる筈であります。特にこの種の試みが行われたことのない九州に於いては、特筆すべき意義を持つたと私達は固く信じております。勿論、参加者の殆んどは初めて顔を合わせた者同士であり、僅か四日という

短時日の間では解き尽せぬ問題も幾分残されたかと思つてありますが、ともかく生き方の根本的態度として、我々が一つの共通の運命の下に生きてゐるという事実、国民共同体という連帯の中で思索し行動して行かねばならぬという実感、これだけは参加者全員の胸裡に強く刻印されたのであります。そしてそのような生き方の支えになるものは、単にナショナルリズムという感情的な標語ではなくして、奥深い自国の文化に対する確信でこそなければならぬこと、即ち心なき敗戦の申し子共によつて泥土に委し去られた日本文化の伝統の精髓を今こそ恢宏し、現代の諸課題に対処する原理として光あらしめねばならぬ、ということが最終の結論として語り交されたのであります。この日本文化の性格や系譜については、各講師より夫々の角度からする説明が行われ、参加者の真剣な討論に附されたのであります。特に聖徳太子の「自他の二境を等しうして群生と苦楽を偕にす」という汎人間的同信同胞生活の極致とも云うべき遺教が、等しく全員の心を打つたことを附言して置きたいと思つてあります。

云うまでもなく合宿は、それ自体をもつて完結するものではありません。それは云わば参加者諸君が学校や職場に歸つて夫々の課題に直面する場合のための一つのきつかけをなすものに過ぎず、その意味では爾後の生活との連関に於いてその意義を全うするものと云えるのであります。しかも我々をめぐる四囲の状況は依然として混沌の相を脱しやらず、仔細に觀察すれば破局の危機をすらはらみつつあるかに推察せられます。我々の一人一人に、夫々の国民的責務を確実に果し、そうすることによつて祖国の命脈を防護せんとする決然たる意志が、今日程切実に要求されている時代はないのであります。このような時にこそ我々が合宿で得た体験とつながりは、何物にも替へ難き力の源泉として重大な役割を果すものと確信いたします。

再び申しますが、この民族復興の根底を培う仕事は、今日只今から手を着けられ、長い年月と不退転の努力をもつてはじめて遂行し得る一大国民的事業であります。それは窮極目標に於いては遠大であります。甚だ速効的ならざる地味な仕事であります。それをなし得る当体は、断じてお役所仕事やマス・プロ的学校教育ではありません。況ん

や利を以つて真を覆う利益団体や、眼中に政權しかない有様の政治団体ではあり得ないのであります。それは実に日本民族の進むべき道を求めて常住自己研鑽を怠らず、止み難い国民的義務感より自らこの大業に献身せんとする人々の結合によつてのみ遂行し得るものであります。私達は決して自らを高きに置く選良意識からではなく、寧ろ反対に地の塩としての謙抑な気持から、固い国民的連帯の結節を一人から一人へと拡大して行くことを念ずるものであります。それ故、我々の研究会は特定の政綱やイデオロギイを持つた団体ではなくて、文字通り自由なる結合体であります。志の根底に於いてつながる者がそこに結集し、お互いに研鑽し協力して行く拠点であるに過ぎません。私達を背後に於いて支えるものは、いかなる社会的勢力でも学者的名声でもありません。私達を支えるものは、一国民として野に叫ぶ真心のみであり、この真心を受けとめてくれる共鳴共感の同信同胞世界のみであります。この思いあればこそ、今は微々たる存在にしか過ぎない私達の前途には、洋々たる未来のあることを敢えて声高く揚言するものであります。

合 宿 報 告

一、合宿に至る経過

昨年夏、霧島山麓に於いて「国民文化研究会」の主催のもとに第一回全九州学生青年合同合宿が挙行された。そこでは全九州各地より約百名の参加者を得て「現代日本の直面せる諸問題」というテーマのもとに、社会主義革命理論の誤謬の究明と、現代日本人の精神的支柱の問題に焦点を絞り、四日に亘つて真剣な討議が重ねられた。その後われわれはその体験と成果を緻密に分析し、謙虚に反省を加え、西は岡山から南は鹿児島に至る会員二十数名が繁忙の生活をぬつて数次にわたる連絡会議を重ねた。その討議の中から、第二回合同合宿は万難を排して行わるべし、との結論が出たのは今年の春まだ浅い頃だつたと記憶する。合宿地は福岡市百道海岸、社会教育会館に決定した。昨年の霧島における幽邃の感は求むべくもないが、元寇にゆかり深い多々良浜辺の潮風を受けて立つところ、その整備された豊富な施設は合宿への期待をいやが上にも高めてくれる。かくて会員は各自の本務に忙殺されつつも、万端の準備を急ぎ六月下旬、次の如き案内状を各所に配布したのである。

これと同時に、ポスターや新聞紙面を通じての広報活動も活潑に行われた。こうして我々の呼びかけに応じて、続々と参加の申込みが続き、我々を勇気づけてくれた。その中には昨年の夏、霧島で別れて以来、顔を合わせる機会もなかつた懐しい友の名前もあつた。又は索漠とした日々々の生活の中に、一脈の光明を見出すために、是非共合宿に参加したいと切々たる希望を寄せてくる未知の友の名前もあつた。

全九州学生青年合宿研修会案内

主催 国民文化研究会

思うに、現代の青年・学生層の中には、自己がその中で育まれその為に自己の力を發揮すべき国民生活に對し、絶望視もしくは白眼視する風潮がかなり強く存在してはいないでしょうか。たしかに現在の日本の置かれてある苦境や、それに対処すべき為政者の方策や社会の諸矛盾については、いろいろな意味で不満を感じるのが当然でしょう。けれどもそのような不満を、諸共なる国民的基盤の上で慎重に革正して行くことを思わずに、或いは矯激なイデオロギーをう呑みにして破壊を夢み、或いは直情的な反抗闘争に駆られることによつて自己満足を見出す如きは、果して国家社会の健全な發展にプラスするものと云えるでありましょうか？ 少なくとも我々の身辺に生起する事象よりすれば、かかる憂うべき傾向が日ましに増盛しつつあるかに見受けられます。

勿論、青年本来の眞理への熱情と鋭敏な批判精神とが、このような明白に背理と目される動きに窺伏させられてしまうとは思われません。私達は、かかる風潮に對して満されぬ疑惑を抱き、真劍に自己の立脚地を求めて精進しておられる人が無数にあることを信じます。そして問題は、そのように潛み憂うる人々の心情を繋ぎ、正確なる學術理論によつてこれを裏打ちし、広い国民的共感の上に立つ中正不偏の道を打ち開いて行くことにあると考えます。それがためには何よりも先ず、有志の人々が一堂に會し、一切のイデオロギー的対立や職業上の差異や世代間の誤解をとり去つて、隔意なく意見を交換する機会が作られねばなりません。この合宿研修会はもとよりそのための研鑽交流の場を提供するものに他なりません。

私達は昨年夏、霧島において同一主旨の合宿研修会を開催し、特記すべき成果を収めることが出来ました。そこでは約百名の参加者が自由な立場で思索し討論し合ひ、豊かな情意の交流をもり上げることができました。今年も左記の要領により福岡で実施いたしますが、特に九州ではこの種の機会が少ない点を考

慮し、中央より一流の講師を招聘して親しくその講義を聴き、意見を交換する形体を整えました。長い夏
中休暇の一時を、自己の人生観、世界観の確立のために有意義に過されようとする学生諸君、広く知識を
求めて自己の勤労生活に希望と意義を見出そうとされる一般青年有志諸君が、奮つて参加されることを待
望いたします。

一、期 日 八月二十日（午前十時集合）より——八月二十三日（午後二時解散）まで

一、場 所 福岡市百道（モモチ）社会教育会館（博多駅より市電「姪ノ浜」行、防塁前下車、海
岸へ約一キロ半）

一、参 加 者 九州各地の大学高校生、教員、一般青年有志約百二十名の予定（年令、性別、職業等
に特定の制限なし）

一、研究テーマ 「動乱の世界における日本の進路」

——国民生活上刷新の根柢を何処に求むべきか？——

一、実施要項 (1) 講義（哲学、経済、政治、思想の各分野に亘り、夫々一流の講師より聴講する）

日本文化の位置

東大教養学部講師 竹山道雄氏

歴史観の諸問題——マルクス主義の超克——

立正大学教授 浅野 晃氏

現代哲学の窮極の問題

日本大学教授文博 高山岩男氏

世界経済の基本的動向

アジア大学教授経博 伊部 政一氏

日本経済の特質と経済計画の方法

高崎経済大学教授 石村暢五郎氏

日本文化の源流

労働科学研究所 高木尙一氏

——聖徳太子の信仰思想を中心として——

その他研究会員による講義

(2) 右の講義に対する懇切なる質疑応答、及び班別・全体による自由討論

(3) 各種のリクレーション

一、携 帶 品

合宿参加証、筆記書類、洗面具

米一升五合（十食分）——持参しない者は現地にて現金に換算する——

一、費 用

(1) 参加者の負担分

(A) 副食費 四百円（前以つて申込みの際に納入する）

(B) テキスト代 一百円前後

(C) 旅費の片道分

(2) 研究会の負担分

(A) 宿泊費 全額

(B) 参加者各自の片道旅費（学校或いは郷里の中合宿地に近い国鉄駅から博多駅までの三等乗車

賃）

※但し急行料金その他は含まず、学生の場合は学生割引によつて計算する。

こうして集まつた参加申込者の中核は何んといつても大学生であつたが、十一名の教育関係者を始め商工業、農業等もあり、特異な例としては七十三才の老婦人もあり、十七才の若い高校生、九名の女性も含んで、さながら国民生活の縮図の観を呈した。この百余名の参加者を十三、四名を一班として、七班に分け、会員二名づつが班長となり、学生二名が世話人となつて、合宿の全期間を通じて討論や生活指導等の直接の事務に当るべく準備が整えられた。こうして激しい緊張と期待のうちに我々は八月二十日を迎えたのである。

ここまで漕ぎつけるために最も危惧された点は資金の面であつたが、幸いにして我々の意を汲まれた有識者の方々の温い御援助や、全国に散在する会員の知己諸友の物心両面に渉る御援助によつて、所期の目的をほぼ達成し得たことについては、感謝の言葉を知らない。茲に厚く御礼申し上げる次第である。

合 宿 日 程 一 覧

23日	22日	21日	20日	
起床 洗面 体操 朝食	起床 洗面 体操 朝食	起床 洗面 朝食		— 6.00
高木尙一氏	竹山道雄氏	浅野 晃氏	受 付	— 7.00
南波恕一氏	全体討論	全体討論	班別編成	— 8.00
全体発言		班別討論	開会式	— 9.00
昼食 整理	昼 食	昼 食	昼 食	— 10.00
閉会式	小田村寅二郎氏	伊部政一氏	自己紹介	— 11.00
地域別懇談 解 散	全体討論		名越(会員)	— 12.00
	高山岩男氏	石村(会員)	川井(会員)	— 1.00
	全体討論	全体討論	全体討論	— 2.00
	夕食	夕食	夕食	— 3.00
	入浴	入浴	入浴	— 4.00
	班別討論	講師別討論	班別討論	— 5.00
	コ ン パ	班別懇談	参加者のみ懇談	— 6.00
	就 寝	就 寝	就 寝	— 7.00
				— 8.00
				— 9.00
				— 10.00

二、合宿人員の構成

招聘講師 八名
来賓 五名
会員 十九名
参加者

一 般 三十九名

地域別内訳 福岡十三、熊本十一、宮崎六、松山三、山口三、鹿児島二、東京一

学 生 五十六名

地域別内訳 福岡二十二、鹿児島二十二、東京七、長崎、熊本、宮崎、松山、仙台 各一

総 計 一二七名（内女子九名）

三、合宿経過報告

——以下合宿展開の過程をやや詳細に述べるつもりであるが、各講師の講義要旨は紙数の関係で、極度の概括を余儀なくされた。この点事情了察の上御寛恕ありたい。——

第一日 昨夜からの七号台風がゆつくり北上しつつあり、不安な雲行きである。南九州はダイヤの混乱も多少あるとか、そのためか集合も少し遅れたが、十一時頃までには班別の編成もほぼ完了した。

予定通り十一時半より開会式、期待と緊張のみなぐる中を会員を代表して瀬上安正氏が登壇、大要次の如き言葉を述べた。



(会館前)

「縁あつて我々百余名の者がこの福岡の地に集まり、三泊四日の生活を共にすることにになりました。思えば不思議な機縁であります。現在、我が日本の国家国民生活は階級に或いは世代に分裂の一途をたどつていと申していいかと思ひます。勿論それに対する打開策は種々考えられておりますけれども、観念によつてとらえられた方策は、窮極において何の効果もあげることには出来なないのであります。我々は今ここに「動乱の世界における日本の進路」——国民生活向上刷新の根柢を何処に求むべきか——ということ合宿のテーマとして取り上げましたが、このテーマを中心として年令や職業の差別をこえ、一切の成心を去つて、心と心を触れ合ふ語らいの場所がもたれますならば、そこにこそ民族再生の根源が把握出来るのではあるまいか。我々国民文化研究会はかゝ信じて、このような機会を今参加者の皆様に提供したものであります。分

裂した国民生活をもう一度統一あらしめるための集約点として、ささやかではありますが、かりそめならぬこの機会を充分に生かしていただきたいと思ひます。」

これに続いて合宿全般の事務を担当する小柳陽太郎氏は、ここは単なる講習会の場所ではないし、また議論を好む者の集まりでもない。むしろ講習会や議論のための議論が、急迫した祖国の現状を思う時に、如何に空しいものであるかということ胸に沁みて知り得たところから、合宿は出発されなければならないと前置きして、そのために欠かすことの出来ない協同生活、団体生活上の紀律その他に関する諸注意を述べて開会式を終つた。

昼食時を利用して行われた全員の自己紹介は、何となくぎこちない参加者の気分をほぐしながら、ようやく合宿は

軌道に乗り始めた感じである。自己紹介の最後を飾つて、東京から馳せ参じられた小田村寅二郎氏は、三条実美のふちなみのふちのうら葉のうらとけてかたらふまどるたのしくもあるか

という歌を朗唱して合宿への饒けとされた。僅か三泊四日の接触によつて、かかる友情が実現し得ることを望むのは至難である。しかし友を求める至情が一人一人の胸に萌し、友なくしては思想生活を営むことの出来ない事実に向面した時、この歌に示された詩情は必ずや合宿参加者の胸に蘇つてくるであらう。

午後の劈頭の講義は、先ず二名の会員による問題の提起という形でなされた。

名越講師の「現代日本の盲点」は、中央公論八月号の巻頭論文「忠誠論」の検討から始められた。

『国家が完全に個人の幸福を保証して呉れるまでは不忠の権利を首保せねばならぬ』という忠誠論の筆者の思想は「テイク・アノド・ギブ」の思想を露骨に出したもので、戦後のエゴイズムの風潮の最大公約数といえよう。思うに現在最も要請されるものは憲法に対する嚴肅な態度であるが、遺憾ながら一般の人々の憲法への態度は極めて傍觀的であり、下剋上の風潮だけが徒らに時代を包む雰囲気として感じられるばかりである。かくして日本全体から秩序感が失われ、国家全体がいわば「軟体動物」的醜態を暴露しつつある。その根源は何か、その政治的跛行状態を導いたものは何か——それは「守るべきものの欠如」——であり、それこそが日本の最大の盲点であると云わなければならぬ。例えば英国の「国防白書」では、守るべきものは *Way of Life* であることを明記しているが、これはつまり「歴史的経験」——民族固有の生き方といえよう。英国のあらゆる政治外交の背後にはこの確固とした民族の歴史的経験があることを知らねばならぬ。しかるに日本に於いては招待外交の糸の操るがままに放任され、複雑な外交問題を自主的に解決する国民的な統一意志は全く感ぜられないではないか。さればかかる悲しむべき内部分裂の空白を埋めるために、我々は日本独自の「歴史的経験」に生命を与え、先人の切実な志を継承して民族思想の根源を培う以外

に道はないのである。』

かくて講師は今一般に平等主義の権化といわれている福沢諭吉の全著作に貫かれている「独立自尊」の精神を看過すべきではないことを訴え、岡倉天心の「内からの大勝利」(東洋の理想)ということば、親鸞の「自然法爾」の思想、聖徳太子の「我独り得タリト雖モ、衆ニ從ヒテ同ジク拳^{オコナ}へ」(十七条憲法)の語をあげて、同朋協力による国民的自立意志の結集が急務であることを情熱をもつて強調した。

続いて川井講師は「現代思想の根本課題」という題名をかかげて壇に立つ。

講師は先ず戦後「世代論」が盛んであるが、これは国民を分裂させるおそれがあること、この悲しむべき事態を克服するためには、世代の差異を越えた場で胸襟を開いて語り合う場所を国民自らの手によつてつくり上げて行かなければいけないと説き、進んで「現代思想の課題」として、次の三点を挙げた。



(右から川井、名越講師)

『先ず第一点は「逆コース」という言葉が横行しているが、それならば戦後は果して「順コース」であつたのか。それを厳密に問うことなしには決して「逆コース」という言葉を使うことは許されない筈である。思うに戦後の歴史を規定する基本要因は敗戦—占領—不安定な独立—ではなかつたか。成程、戦後は凡ゆる分野に亘る変革が行われたけれども、そのどれをとつてみても上述の基本線の外に出るものはあるまい。例えば思想の自由、それ自体は成程結構なことであるが、それが一体どのような情勢の下で論じられたか。占領軍の威圧と迎合的インテリの阿諛を想起してみるがよい。平和憲法にしても教育改革にしても又しかり、そうしたことから凡ゆるよきことが行われていながら、それは決して日本人自身の意志、

日本人自身の深い納得の上では行われなかつた。従つて抽象的に考えれば正しかつた思想も、それが国民生活の中に具体的な内容を伴わなかつたために、逆にスローガンのみに突つ走つて、極端に愚劣な現象を示すこととなつてしまつたのである。第二点は、戦後の日本人の中には祖国へのいわれなき卑下蔑視の感情が流れていること。第三点は敗戦による歴史の断絶によつて、現実性を失つた抽象的理想的思考法が横行していることである。この与えられた思想の自由、日本への軽蔑、空想的思考の三つは相互に結びついて戦後の思想を支配している。

例へば「デモクラシー」ということは、人間自身の反省と努力、特に人間的国民的共通の連帯性に支えられてはじめてスムーズに実践される政治思想であり、完成された——乃至は謙虚に完成を目指す——個人を前提とするのに、現在では単なる官能主義とエゴイズムの弁明に墮してゐるのではないか。一方「社会主義」とは元来十九世紀的資本主義の矛盾に即して、地道にこれを革正せんとする動機に発したものであるのに、所謂進歩的インテリ達はこの發展段階説的に受け取つて現実的地盤がないにも拘らず、最終的な結論として階級革命を夢みているようであるが、かくの如きは輕薄極まるイデオロギー偏執に他ならないのである。従つて現代思想をその混迷の淵から救い上げるために、入り乱れる様々の言葉、觀念の中にそれらが本来あるべき性格、内容を再確認すると共に、それらが日本の現実の中でどう撰取消化さるべきかを国民一人一人の胸に問わなければいけない。ここにこそ日本民族が果すべき世界史的使命があるのだ。』

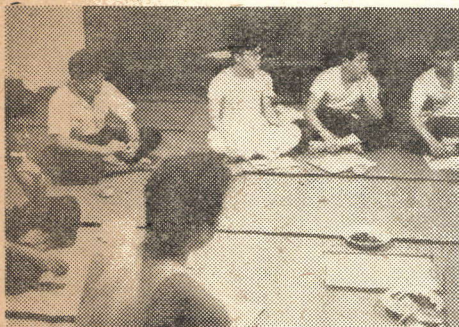
講師は更に個人、国家、人類という系列の中で、協同体的連帯——国民国家——の確立の急務と、そのための各人の責務の自覚と祖国を守る意志の振起とを沈痛な言葉で力強く参加者の胸に訴えた。

二講師の問題提起の中核は、現状への痛感から發した国民的な意志の結集の問題であつたといえよう。ジャーナリズム一般に流れている教養講座的な雰囲気とは趣を異にした二講師の發言は、聴衆によつては相当のショックであつ

た。率直な共感と強い反撥が会場を支配したのは当然である。果して全体討論には或いは核兵器の問題について、或いは国家的エゴイズムの問題について、或いは日本に於ける左翼勢力伸張の基盤をなす精神状況は何かという基本的な問題について活潑な質疑応答が繰り返され、討論は白熱を帯びて来た。

ここに提起された様々の問題は、今合宿のテーマでもあり、さらに云えば生涯をかけたテーマでもあり得よう。しかし問題はあくまで切迫した祖国の危機を思う痛感から語られるのでなければならぬ。若しかかる痛感をぬぎにして単に知的に論じられるならば、それは決して何ものをも稔らせることは出来ないであろう。知的な解決を内側から支える人生的、民族的な体験を求めるためにこそ我々はここに集まつたのである。我々は複雑な問題を孕んだまま最初の出発点に立ち帰らなければならない。

かくして夜の班別討論は、かかる配慮のもとにさらにほり下げた自己紹介や体験の告白によつて始められた。夜も更けて十一時も過ぎた頃、七つに分れた各班の班長から討議の様相が続々と報告されて行く。学生生活における学問への情熱の稀薄化にいたたまれないおもいで合宿に参加した一学生は、正しい学問の研究方法は何か、という問題をめぐつて日頃の感慨を語つた。大東亜戦争の開始前における日本の行動についての厳正なる確認と卑屈感の払拭なくしては、日本の将来を語ることは虚妄であると訴えた学生もあつた。宗教の問題、天皇制の問題、日本の文化伝統の問題と、ここに提出され論議された問題は、さながら日本における現代思想の縮図である。中でも政策的な問題として一番大きく取り上げられたのは原水爆の問題であつた。



(班別討論)

核兵器の実験禁止を心から訴える学生の心情は貴い。しかし徒らに大声叱呼するだけではなく、原水爆の悲惨を人類にもたらさざるがために、一つ一つと手を打つて行く緻密な思考と現実的政治感覚こそが、今何にもまして要請されているのではあるまいか。今は正義の名に酔うべき時代ではない。正義の美名にかくれた様々な戦略意志を見破りつつ、確実に正義をこの世に実現すべき時代である。確固とした現実を足許に踏まえつつ人類の幸福を念ずべき時代である。確固とした現実、それは何か、それは国家であり、我々にとつては掛替えのない祖国日本である。ここに集うた百余名の心の底を意識するとせぬとに拘らず、奥深く流れて行く民族の血脈、それこそが我々にとつての究極の現実を外ならない。

こうして合宿第一日はようやく激しさを加えて来た台風と共に暮れて行つた。

第二日 激しい風雨の中で第二日目の朝を迎えた。浅野講師の「歴史観の諸問題—マルクス主義の超克—」は講堂をゆるがす疾風の中で淡々と語り始められた。

「歴史という学問は奇妙で恐しい学問である。膨大な資料の山の中から一回性という特徴を持った事実を押えることが先ず困難である。次にその事実を縦に因果関係の糸でつなぎ、横のつながりを究明して歴史を組立てるのだが、そこに果して他の学問と同様に法則性というものを簡単に設定出来るのか。思うに史料は過去のものであるが、歴史への関心は生きた人間のものである。生きるための問題を如何に打開すべきか、そこに歴史への関心は生まれてくる。従つて歴史には未来への希望や人生観が入つてくることは避けられない事実であつて、そのために歴史が客観性、法則性を持つことは極めて困難であるといえよう。

更に歴史が人間の歴史、世界の歴史となつて来たのはごく最近のことであつて、永い間それは孤立した個々の集団の歴史であつた。そこには民族の性格や環境の相違によつて、夫々の特殊性がある筈である。これを早急に「古代」

「封建」という如き概念から説明するのは極めて危険であつて、事實に即した思考こそが何にもまして必要である。例えばギリシャ・ローマの時代も日本の上代も、同じ古代という言葉でとらえようとすれば、むこうにある奴隷制というものが必ず日本にもあつた筈だ、という考えから非常に無理をして何かそんなものをつくり上げようとする。そのような観念の先走りした歴史解釈が如何に横行しているか、よくよく省りみなければならぬ。ともあれ歴史とは実に不可解な学問である。

一体近代を動かしている思想はすべて現状への不満から出發している。ブルジョア社会とは平穩無事、限らない退屈に低迷する社会であつた。これに対する反撥が文学の面ではフローベルの現実の剔抉やボードレールの反逆となつて行く。これが所謂ニヒリズムの世界であるけれども、このような、人間が物のような感じになつてゐるのをもう一度人間のなかに引きもどそうとする動きが、ブルードンやオーエンの社会主義となつたのである。マルクスはこれを空想的社会主義と呼んだけれども、決してそんなものではない。非常に立派なものだ。さてマルクスの唯物史観もまたブルジョア社会における人間の自己疎外の現実からの救いとして考へられたものである。従つてその情熱的な仮説は、実証的な学問の結末というよりも、むしろ彼の学問の出発点において既に彼を動かしていたものである。されば今こそその仮説の当否が問われなければならないのに、若い青年達がその底にある情熱にひきずられてこれを信奉して疑わぬのは、非常な危険といわなければならない。

そんなことを考へてみればみる程我々には実に西欧のことがわからない。例えば資本主義というけれども、その実体がなかなかつかめない。しかし資本主義成立についてのウェーバーの史観は独自のものがあり、いろいろと考えさせられることが多い。彼は資本主義成立の根底にピューリタニズムの超自然の否定と合理化の精神を認める。つまり利潤による享樂の拒否、仕事そのものの中における神の栄光の讚美、このピューリタニズムが資本主義を生み出す精神的な背景となつた。即ちこのような精神によつてつみ重ねられたメカニク的な利潤が長期の投資となり、資本主義

を生んで行く」と論ずるのである。

このように資本主義の成立をさかのぼって行けばキリスト教にぶつつかる。そしてキリスト教、その背後にはヨーロッパの神、唯一絶対神ヤーヴェの存在がある。これをぬきにしてヨーロッパの思想は到底論じることが出来ないし、ここにヨーロッパの史観を説明する重大な鍵がある筈なのに、このヤーヴェという神の存在が日本人にはどうし

ても理解出来ぬ。とにかく歴史というものは実に興味のある問題だけれども、それを正確に掴もうとすれば、わからない点があまにも多い。殆んど絶望しそうななる。歴史とはそのようなものだ。』

歴大な歴史という問題の前に立つた人間の困惑を、卒直に体験的な言葉にこめて講師は諄々と説いて行かれる。そこには明快な結論はない。しかし結論がないということこそ歴史の姿であり、又人生のあるがままのありようではなからうか。それを包みかくさず、飾らずに訴えられた講師の言葉に、我々は学ぶことのきびしさを切々とうけとつたのである。



(浅野講師への質疑)

全体討論は川井会員が司会した。「西洋合理主義はどこからきたか」「西洋文明と東洋文明の本質的相違は何か」という如き大きな問題が出されたが、講師の応答も情熱のこもった懇切なものであった。特に「日本における近代化」の問題については、異文明の受け入れは物質的な形の移入と同時に、近代を生み出した精神の受け入れであつて、これは日本が日本でなくなる危機を孕んでいる。講師はこれを拒否するか受け入れるかの巖頭に立たせられた幕末先人の苦闘をしのびながら、これはそのまま今日の問題でもあり、すべての人が自分の問題としてとりくむことの必要を力説された。ただその場合に史観は決

して救済をもたらすものではなく、内面生活の充実、日常行動を基礎づける宗教的態度こそ必要である、と説かれて討論を終つた。

午後の経済問題の講義には、反マルクス主義の立場に立つ二人の講師を迎えた。伊部講師は、レニングラード大学在学中の体験と、それに続く外務省調査官としての豊富な体験に基き、論断は力強く、論旨は明快を極めた。「世界経済の基本動向」と題する講義の全容を概括すれば凡そ次の如くである。

『マルクスの唯物史観は生産力と生産関係が歴史を推進する力と考えているが、これは間違ひである。生産力を変革させるものは技術であり、技術の発展は他ならぬ人間の精神の働きによるものだ。従つて唯物史観に代るに技術史観を以つてはじめて歴史の進展は把握し得るであろう。こういう史観によれば、技術の異常な発展によつて、第二次大戦後は近代経済から現代経済へ、明確に違つた歴史に入つて来ている。今や機械が筋肉労働に代り、オートメーションは頭脳労働に代らうとしている。こういう巨大な技術の変革は当然、自由放任の経済からケインズ流の計画経済への移行を要請するであろう。

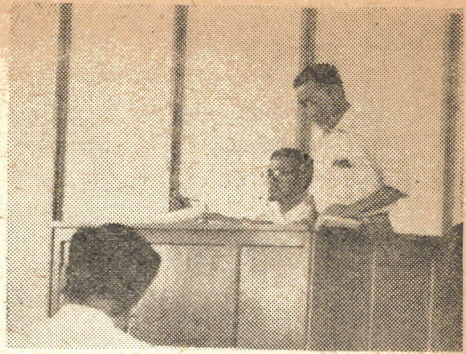
現代経済の特徴として種々の分析が行われ得るが、それを以下の五つに集約する。第一に国家財政膨張の原則である。国家は経済市場の番人であれという自由経済時代の原則がくつがえり、国家予算は国民経済の縮図となり、財政々策技術の比重が大きくなつて来た。第二に資本と経営の分離である。ジェームス・バーナムの「経営者革命」Maneial Revolutionによれば、いわゆる資本主義社会は経営者社会へと変貌しつつある。即ち、資本主義の中核は何といつても株式会社であるが、株券のもつ利潤請求権と経営参加権のうち、株主の大部分は後者を放棄しているのが現状である。かくして株主と経営者の分離が起つてくる。第三に企業の公共性増大である。企業の根本には営利性と公共性があるが、後者の比重が著しく増大している。そしてひとしく利潤といつてもマルクスの如く搾取によるも

の、独占によるものの外、未来の不確実的要素（未来の予想）から来る利潤、能率の増進（生産性向上）による利潤のあることを忘れてはならぬ。第四に貨幣経済の高度化である。金本位の時代に比して、貨幣の流通を金融財政々策によつてある程度操作し得る時代となつた。それから第五の計画経済の問題が出て来る。これは勿論、マルクス流のそれではない。自由を実現するためのそれであり、自由制計画経済ともいふべきものである。それは子供を育てる時の「目をはなすな、手をはなせ」という態度であり、商品を通貨政策で動かす方法であり、商品自体の統制であつてはならない。

マルクスの資本主義崩壊の予言とは逆に、アメリカでは貧富の距離が縮まり、ピーブルズ・キャピタリズム（人民資本主義、民衆資本主義）とも名づくべき段階がきつつある。マルクス経済学は十九世紀のものであり、これを唯一の信条とすれば、現在の複雑な経済現象を説明することは到底不可能である。』

伊部講師の世界経済の問題に対して、石村講師の「日本経済の特質と経済計画の方法」は緻密な分析と正確な立論、具体的な経済政策の技術面について、聴衆に多大の感銘を与えた。

『現代における経済学の泥沼として、価値論と経済発展説の二つをあげることが出来る。前者は労働を価値実体とする労働価値説であり、後者は唯物史観である。これらはいづれも思想的にいえばヘブライズムに淵源している。（この点については第一回合宿報告書の石村講師の講義参照）特に唯物史観では生産の面を強調する余り消費の面が著しく軽視されている。経済とは生産と消費の関係であり、この二つを均衡させるものは価格である。価格を生み出すのは市場経済であり、これこそ「見えざる神の手」である。マルクスの如く市場経済そのものを撲滅するのは暴論であつて、市場経済のすぐれた機能を残しつつ、これに「計画」を加えることが最も妥当な経済改革の方法でなければならぬ。かくの如き経済学についての根本の考えから見てゆけば、資源の少い、絶対的過剰人口を擁する日本経



(石から伊部、石村講師)

済の現状には、マルクス理論は勿論、ケインズ理論もそのままでは適用出来ないのである。」

講師は更に日本経済の一面には「退歩の経済学」「資源老廃化現象」のあることを論述し外貨危機の真因や最適計画予算の問題にまで触れて興味津々たるものがあつた。(講師の論説の詳細は近い中に当研究会より発行予定の論集を参照していただきたい。)

以上二講師の講義は空疎な観念的態度をすべて拒否しながら、あくまで経済現象の事実在即した着実な思考態度を以つて一貫して語られたが、この点が特にきわだつた印象として参加者の胸に刻まれた。

マルキシズムをもつて説明しうるか」との質問に対して伊部講師は、ソ聯に最初にマルキシズムを入れたものはブレハーノフであつたが、後異端者とされたこと、その後トロツキー、ブハーリン、スターリン等の権力闘争と粛清が相つぎ、現在に於いてはマルキシズムに名をかりた権力政治が行われていることが答えられた。更にソ聯内部の労農の階層間の矛盾や、中共貿易についての質疑が重ねられた。後者の質問について石村講師は、取引上の相手が国家であり、しかも注文が不定期であるので、或程度の国家保証が必要であること、パートナー制やアジア決済同盟の必要などを答えた。その他質疑は絶えなかつたが、それは夜に予定された講師別の討論にまわすこととして午後後の行事は一応終了した。

台風はようやくやく去つて、雲の切れ間から青空が見え初めた。

夜は班別編成一応崩して各講師別討論会を催し、左記の如く参加者各自の希望の部門に別れて徹底的な質疑討論を行うこととなつた。

政治部門（小田村、浜田講師）

経済部門（伊部、石村講師）

教育部門（南波、下畑講師）

歴史・文化部門（浅野、川井講師）

この講師別討論会の席上、政治部門においては天皇制或いは国家政体の問題を中心として論議がすすめられ、経済部門においては午後の講義に対する専攻学生を中心とした質疑が行われた。歴史文化の部門においては浅野講師が岡倉天心については二十数年前その著述にふれられた折からの体験的所感を披瀝され一同忘れ難い感銘をうけた。又教育部門においては日教組問題が積極的に取り上げられ、内部から批判は正をおしすすめて行くべきか、外部へ出て別の組織の上に立つた積極的な革新が求められるべきか、熱心に討議されたが、ともあれ日教組の政治偏向の闘争態度については鋭い批判が集中した。

かくして二日間の日程は終つた。しかし参加者の中には講師の話をあれこれと承つておこうという安易な空気がどうしてもぬけきれないのである。従つて講師の話に対する共鳴にしても反撥にしても単なる知的欲求のレベルをぬくことが出来ない。一つの思想が異質の思想とふれ合う時は必ずや激突の形をとるべきである。そんな考えもあるのかという位のふれあいの中にわれわれは「思



（講師別討論）

想」を見出すことは出来ないのである。思想というもの、学問というものもつている、かりそめならぬきびしさは単なる知的な接触によつて得られるものではない。そう思えばこそわれわれは万難を排してここに集る機会を作り出したのではなかつたか。合宿はじまつて二日目、この転機をどう乗り切るか、夜のふけるのも忘れて会員の反省と討議はつづいた。ともあれ講義、討論という形をどこかでせきとめて一度渦をまきかえさなければいけない。かくて明日、小田村講師の講義によつてわれわれの気持を全面的に参加者に訴えることに一決、寝についた時はすでに二時も過ぎていただろうか。

第三日 台風一過、快晴。百道の浜辺でのびのびと体操をする。爽やかな朝の日射しを浴びながら遠く近く浮ぶ島

々の姿が鮮やかに目にしみる。

午前の講義は竹山講師の「日本文化の位置」である。この講義は新潮九月号所収「日本文化を論ず」を基礎とした日本文化の独自の位置づけであり、併せて近代化の問題や史観の問題が中心となつた。

『西洋人は日本という国は恐しく、進歩の早い国だと考えている。しかるに戦後の日本人の中には「日本は野暮なおくれた国である」という考え方に立つて、あたかも敵国の歴史を見るごとき一方的感情的な論断が横行している。第一次大戦後、ドイツにおいては諸文化の中でドイツの位置を再認しようとする動きが顕著であつたが、それに比して日本の現状はあまりにも無惨である。

今、日本の文化を世界のそれの中において考へる時、日本の歴史はロシア、印度、支那などとは異つて、西欧のそれに余りによく似ている。即ち独自の華



(体操——浜辺で)

やかな文明を作りながらそのまま固定停滞して死滅した文明と異つて、外からの素材を吸収しつつ独自の発展を示し得た点で西欧と日本の間には奇しくも平行現象があるといえるのではなからうか。西欧文明がギリシャ・ローマ文化とキリスト教を吸収したゲルマンの文明である如く、日本のそれは儒教と仏教を吸収した日本民族独自のエネルギーの所産である。更に具体的な歴史の展開においても、例えば中世の性格を考へて見た場合ヨーロッパの中世は文化的に一つの絶頂であつたが、その特徴は多元的という点であつて、法皇、神聖ローマ皇帝、諸侯、自治都市などが並立していたのであるが、日本の中世も亦王法、仏法、武家が鼎立し、荘園、寺院領、封建領が夫々別の立法をもつてい



(竹山講師)

たのである。中世において宗教や伝統の力が支配的であつたことも東西を通じて同一の現象であつた。近世の特徴は実力の支配ということで、政治のために宗教を犠牲にした。ブルボン王朝の絶対主義がその典型であり、文化は一元的であつた。日本に於いても徳川時代は典型的な絶対制であつて単なる封建制ではない。ここでは政治に強い影響を与える仏教の代りに現世的な儒教が用いられ、権威は一元的になつてゐる。かくてヨーロッパでは十八世紀から合理主義の時代に入り近代化への傾向が急速に高まつてきたが、日本においても合理主義的傾向、宗教否定の態度は信長の比叡山焼き打ちによつて象徴されているように想像以上にはげしいものがあり、そこに育てられた現実的態度が、西洋文化を他のアジア諸国とは桁違いに吸収することの出来た基盤をなしていると思われる。

さて進歩主義を最初に公式化したのはフランスのサン・ピエールであるがそれはキリスト教の救済思想を、人間の理性による進歩の果に天国を見出すという現世的思考に変化せしめたものといふことができる。それを更におしすすめたのが十八世紀後半におけるコンドルセの「人間精神發達史」であつた。こうして十九世紀に至るとその巨大な富

の蓄積と目ざましい機械化の為に誰一人進歩ということを疑うものはいなかつたのだがこのような考えは第一次大戦以後は信じられなくなつてしまつた。即ち進歩とは、近代とは、何であるか、それをもう一度考えなほして見ることが二十世紀に与えられた課題となつたのである。例えば第二次大戦中のドイツの残忍な殺戮も亦ドイツの近代化が生んだ悲劇ではなかつたか。これを単にドイツに残存していた前近代性の一語によつて説明しようとするのは、あまりに図式的な史観であるといわねばなるまい。又、フランスは近代的な国だという、たしかにそこでは個人的な市民生活は実によく工夫され地上の楽園となつてゐる。しかし第一次大戦以後それだけではすまなくなつてきた。時代は歴大なスケールをもつ機械化、大量生産を要求するがフランスはそれについてゆくことが出来ない。その点むしろ日本がフランスを圧倒してゐるとも考えられるのである。

ともかく近代化を單純に進歩の概念と結びつけ、その為に日本の歴史を正しく読みとることが出来ないところに、現代思想の大きな問題が横たわつてゐるといえよう。』

全体討論は山田会員の司会によつて行われた。「日本の芸術と西欧の芸術との本質的差異如何」という講師の独自の領域にわたる質問に対して講師は日本の芸術は「集中」であり、西洋のそれは「充填」であることを強調され更に日本の芸術の簡素な美しさは、たしかに禅の影響があるが、更に溯ると神道などにもつながることを暗示された。更に「明治時代に於ける国務、統帥、議會の一元的な主体は何か」という質問に対して、それは明治天皇と重臣達であつたこと、近代化につれて權威が多元的に分裂し、民族的有機体が衰えた結果が今回の戦争の悲劇を生んだ最大の眼目であることを説かれ深い感銘の中に午前の行事は終了した。

昼食後会館前に集つて記念撮影、午後の行事は予定された高山講師の講義を若干繰り下げて昨日決定した通り小田

村講師の登壇によつて開始された。講師はわれわれ会員の先輩の立場としてこの合宿が何故に企画され、それは如何なる意義、性格をもつものであるか、それについて講師自身の痛切な学生運動の体験から説き起し更に合宿のみならずわれわれの生涯をかけて貫くべき学問研究の方法にまで説き及んで学問と人生の不可分の關係を情熱をこめて訴えられた。

『今御紹介いただいた通りわれわれは今から二十年程前、当時の東京帝大で学生運動を始めたのであるが、学生運動とは言つても現在の全学連などが総評、日教組等と手をつないで政治運動に突き進んでいるのとは異つて学生生活は一体どうあるべきかといふことの深刻な反省が、与えられた学生生活の中ではどうしても得られなかつたところから自然に学生運動というものになつて行つたと言つてもいいかと思う。即ちわれわれは学生生活の中に次の三点を反省しその打開の策を講じたのである。その一つは学生が国民生活から遊離した優越、特権の意識を持つていたこと、その二つは学問が知識の授受に終始してしたこと、その三つは学生間の情意の交流が全くなかつたことであつた。

このような耐えがたい空気は一体どうして生まれてきたのか、勿論そこに色々の原因はあろうと思われるけれど



(小田村講師)

も、学生生活の大本をなす学問の研究態度方法の中に何か根本的な欠陥があるのではあるまいか。われわれはそのようなことを考えた。いうまでもないが、自然科学では研究の主体と客体は別個に対立したものであるが、精神科学(人文、社会)では研究の主体は既に研究対象の中に居るのである。そこに自ら明確な研究方法の差異が出てくるべき筈であるのに、今の現状では自然科学の方法論がそのまま人間を研究対象とする学問の領域にまで入り込んで来ているし、それに根本的な反省を加えようとする動きは皆無である。ところがわれわれは学生運動をつづけ先人の様な言葉にふ

れているうちに正しい学問の方法は国民生活の正しい理解の上に、切実な人間関係の体験の中に、はじめて築かれるものではあるまいかということ痛切に思い知らされた。

聖徳太子のお言葉に「自行外化ヲ憶シテ以テ心ヲ調伏スト雖モ、若シ自他ノ二境ヲ存シテ修行セバ、則チ修スル所広カラズシテ、物トソノ苦樂ヲ同ジウスルコト能ハズ」とある。自他を分たぬということとは人間にとつて困難なことであり自他をどうしても分けてしまうのが人生であるが、絶えずそれを分けまいように意志することが生きるといふことであると言えよう。この生きるという実感をはなれて一体何の学問であるか、即ち協力の世界、友情の世界を生み出そうとする努力の中のみ正しい学問は育まれてゆくのである。この合宿が企てられた意義もそこにあると思う。即ち正しく学ぶことは正しく意志することである。自他を別たぬ友情の世界を意志することである。』

引き続きいて参加者から様々な質問が投げ出されたが、講師の切実な体験的な言葉によつて合宿の全体的な流れに一つの転機がもたらされつつあることは疑うべくもない事実であつた。班別討論で今まで口を閉じていた人々にも何かを発言しようとする気運が動き始めて来たのである。

続いて高山講師の「現代哲学の窮極の問題」が、該博な学殖と切実な情意を傾けて論述された。

『人類の歴史において知識と技術だけは進歩するものであるけれども、この進歩の概念を哲学や芸術に適用することは遂に不可能である。何故なら人間の知恵は既に二千年前に行きつく所まで行きついていたからである。従つてわれわれが求めるべき哲学は所謂進歩した哲学ではない。それは近代文明と対決する哲学である。近代文明の中核である「技術」を究明する哲学である。』

近代文明の最大の矛盾は、その中に人間性を解体させるものを持つているという点であるが、これに対して唯物論者は、この文明問題の矛盾は社会経済秩序にあるので、革命こそ解決の方法であると説いている。だがこの文明問題



(高 山 講 師)

は果して革命で解決出来るものであろうか、思うに近代文明の人間性解体の原因は人間の能力を最高の権威とする人間至上主義から来ているのである。この人間至上主義の暗黒面については、初期のソシアリトは既に気がついていたし、前大戦後の「西欧の没落」などの文明悲観論にも表われていた。しかも二十世紀に至つてかかる人間至上主義を背骨として驚異的な発達をとげた機械文明は遂に世界戦争の飽くことなき残虐さとなつてあらわれて来たのである。世に戦争の罪がどこにあるかを追求する人々が多いが、若し罪を問わるべきものがあるとすればかかる機械文明を背後から支えている人間至上主義であるといえよう。

又近代国家に於いて、国境線と国防線は一致していたのに、今や武器の異常な発達は十九世紀の国家論や国家学説を完全に置き去りにしてしまつた。つまり十九世紀的な近代国家は事実上崩壊し、強国の国家権力は途方もなく強大となつた。ホッブスが国家を巨人にたとえた時代とは問題にならない距離が出来てしまつたのである。ところがこのような国家権力を行使する基準は「多数決の法」というあいまいな基準にすぎぬではないか。昔の法は宗教的神聖によつて行使されていた。権力を宗教が規制していたのである。しかるに宗教を排撃した現代の法理論が生んだものがかかる多数決の法にすぎぬことにわれわれは人間至上主義の悲劇を見ないわけにはいかない。古来偉大な思想はすべて宗教的なものから生れ、それが世俗的になり、極点に至つてデカダンスになるという過程を通つて変遷する。ヒューマニズムも然り、最初は人間の理性による調和という神聖なものであつたのが今や收拾のつかない乱脈な状態——人間至上主義——に陥つてしまつたのである。人間性解体の病根は文明の内部にある。今やこの人間至上主義は原水爆を産み出し全人類の胸に、人生態度の転機を迫りつつあるのである。

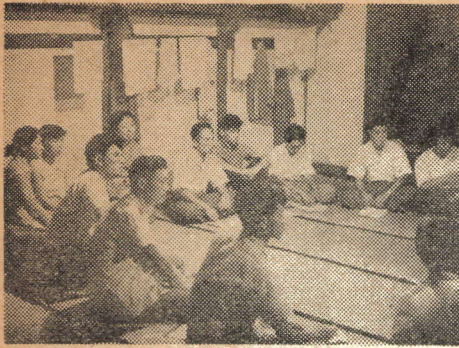
さて近代文明を破滅の寸前に追いつめた「技術」とは何か。ここで「科学」と「技術」を混同してはいけない。科学は「発見」と結びつき、技術は「發明」と結びつく。科学は前から存在している自然法則を見出すことであるが、技術は現実にならないものをクリエイトする。自然を第一の創造とすれば、發明は第二の創造ともいえる。發明——それは自然法則の認識、人間の意志、構想力の三つによつて組み上げられて来た。それは唯物史観によつては説明することのできない人類の榮光であつたともいえよう。人々は人類の幸福を念じて發明をつづけて来た。しかるに今や發明の結果は人間を危機のさなかに追いやつてしまつたのである。

發明が第二の創造であるとすれば、次のような「技術の神学」が考えられるであろう。神の宇宙創造は一回限りの事件ではない。永遠に続いている。技術は神が人間の手を通じて宇宙創造を永遠に続けているものとすれば「技術の

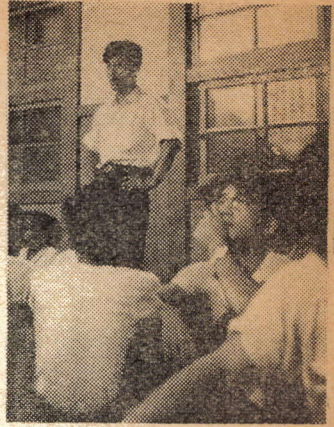
魂は神の魂——人類愛」であるべきだ。ところが従来の技術は個々のものにかかわるものであつたが、原子の技術は個々の生命、自然の根源にかかわるものとなつてきた。今や技術は神の創造と悪魔の破壊という二つの面をもたらし、この人間の危機を救うもの、それは前に述べた、いわば技術の魂であるところの神の前に謙虚にひざまずくこと、それ以外にはない。大切なことはすべてのものを統一する宗教的心情である。』

要約すれば右の通りであるが現代の危機に対する講師の深い哲學的宗教的洞察は参加者一同に強い感動を与えた。

引き続き下畑会員の司会で全体討論が行われた。質問のすべてを述べる余裕はないがその中で「米ソ対立の将来の見透し如何」という問題については、講



(班別討論)



(コンバ)

師は三十年戦争の実例を引きつつ、宗教的信条の差違のため血みどろの戦いをしたが、遂に信教の自由を認めたと点にふれ、救いをそこに求める意味の解答をされたのが特に印象に残った。

夜、いよいよ合宿最後の夜だという感慨が胸にあふれる。まる二日半の生活でわれわれは何を学んで来たのか、今夜最後の班別討論によつてそれは一人一人の胸に厳肅に問われねばならない。七つに分れた班にはこの三日の交りの中からそれぞれ班長を中心とした色調が生れて来たし、ここで概括してその夜の討論を記述することは不可能である。ただ国民生活の分裂をどこでどう喰いとめるべきかということ論じた班が期せずして多く報告されたのはその夜の一般の空気を物語つていたといえよう。或は階級という、或は世代という、勿論われわれはその差別の世界を認めるのにやぶさかではない。しかし差別あるこの世に差別なき人生を味あうことこそ「生きる」という言葉のシノニムではあるまいか。差別を誇張し誇張された幻影におびえる相剋憎悪の世界観は断じて我等の従うべきところではない。あらゆる分野の人々が相集つて百名、心を開いて語り合つた三日間に学んだものは之であつた。

九時半から松尾会員の寄贈による清酒を飲んで全員のコンバ。御国自慢の歌などですつかりうちとけた。最後に元寇の地に因んで「四百余州をこぞる」の歌を力強く合唱して散会。散会後も三々五々百道の浜でかがり火をもやして、学生諸君のう



(コンバ)

たごえが夜半まで続いた。

第四日 晴、昨日のように浜辺まで駆足、軽い体操をする。愈々最終の日を迎えて緊張した空気が、食事をすまして講堂に集ってくる参加者の眉宇にただよつている。

論じつくされた数々の問題、その幅は広く多岐に亘つたけれども最後に、行きつくべきところは日本に伝承された思想的文献の中に、複雑に乱れる近代の思索を統一する以外に道はあるまい。かくて今日の講義は高木講師の「日本文化の源流—聖徳太子を中心として—」からはじめられた。テキストには黒上正一郎著「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」を使用する。太子研究書は多数あるが、太子一代の御事業を、その悲痛なる宗教的人生観に徹入しながら説

きあかしたものは本書が殆んど唯一であろう。本書はいわばわれわれ「国民文化研究会」の思想的原理を示すものである。

「われわれが学問をすすめて行く時常に想起するのはドイツの心理学者ウィルヘルム・ヴントのことである。彼は *Einheitlicher Zusammenhang* (統一的連関)——精神と物質乃至肉体の統一的把握——ということを強調し、そこから学問を広く展開して行つた。もしもこの総合的な態度を失つて精神と物質とをばらばらに把えるならばそこには恐るべき誤謬が生れるであろう。例えば一つの概念をそれが当然予想する実内容と切りはなして使用するという態度もそこに生れてくるのである。戦争中私有財産をなくすことが国体を明らかにすることだという議論が一部に行われたが、これは何等内容をもたぬ国体論がマルキシズムと結合したものであつて、概念的思考によつて内容がすりかえられて



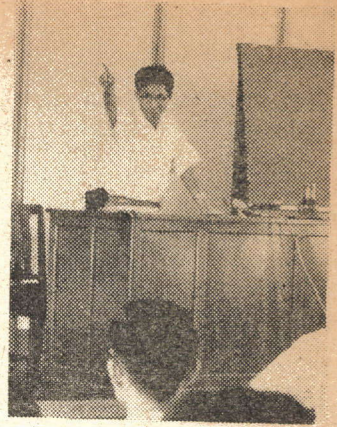
(高木講師)

分らなくなつた適切な例である。即ちわれわれは弁証法というような論理的操作によつて現実を見て行くという一般に流行している思考法を一擲しなければいけない。

われわれはこのような思想をヴントから教えられたのであるが、わが日本の先哲の中に之を求めるとき、先ず最初に心に浮ぶのは山鹿素行である。彼は「格物致知」ということを強調したのであるが、これも心はかたちと一つのものとして考えなければいけないという心理法則をいうのであつて、それは「謫居董問」などの彼の著書に力強く表現されている。この素行が心から仰いだ先人が今ここに話そうとする聖徳太子であつた。太子の十七条憲法の中に「私ニ背キテ公ニ向フハ臣ノ道ナリ」という言葉がある。戦時中「滅私奉公」という言葉が盛んに唱えられたけれども君臣の關係、全体と個人の關係は公と私とはじめから完全に二分して、一をすて、他をとるというような態度で律し去ることは出来ない筈であつて、それは「私ニ背」いて「公ニ向」うという心理的な柔軟な言葉によつてはじめてそのあるべき姿が示されると思ふのである。われわれはこのような言葉の中に太子の深い人生体験にふれるおもしろいがあるのだ。太子は又法華經安樂品の「常ニ坐禪ヲ好ミ静カナル処ニテ修撰セヨ」という言葉について「此ラステ彼ノ山間ニ就ク」小乗の態度を批判し、此彼共に忘るな、といわれたがかかる謙虚な現実感の中にこそ日本思想の源流を求めるときではあるまいか。

現在修身科復活の聲が高いけれども、倫理の具体的内容に心をくだき、思いを致さないで徒らにその題目を唱えるような態度は、かかる調べ高い民族の思想の系譜を痛切に思わざるものの、概念思弁でしかあるまい。太子の示された人生態度は正に千三百年を距てた今日も生き生きと動いてやまぬ日本文化伝統の誇りである。』

続いて南波講師は「日本文化の血脈」と題して、短時間ではあつたが重厚な論調で参加者の胸深くその信条を訴えた。講師は先ず、この地が金印の出た志賀島を望む古代の大陸文化流入の尖端であつたこと、刀伊の入寇や元寇の国



(南波講師)

難を乗り切つた国防の城壁であつたことを語りつつ、現地で歴史を回顧することの真義にふれて本論にはいつた。

『われわれが合宿で得たものは次の三つにまとめることが出来ると思ふ。』

一、一人では考えきれないものがある——共同研究の必要 二、共同の語らいを妨げるもの——我見我執 三、情意に裏つけられた知識の必要 思うに全人格的なねがによつて支えられない理論は、それが如何に巧みであつても、結局は説明におわつてしまふであらう。即ちわれわれの語る言葉は常に全人的な情意の中から生れなければならない一つの力となることは出来ないのである。では一体情意とは何か。人々はある人は意志が強いといふ。そのように使われるいわば力んだような意志は、はげしい人生の動乱流転の中にあつては物の数ではない。われわれのねがう意志とはかかる個人生活のほからいから解き放たれ、はげしく燃え上る感情を統一するものとしての意志である。われわれの心から心につながる精神の流れの中に味あうことの出来る意志である。これこそ人生にとつて缺くことの出来ない体験であり、この体験を養い育てる為にこの合宿が管まれたと言つても過言ではないであらう。又諸君には必ずやこの合宿で感じとつた一つの決意がある筈だ。その決意を直ちに次の生活認識活動に直結してもらいたい。これはいいことだと思つても、それを実行しなければ内攻しかえつて悪い結果をもたらすものである。正しい判断を直ちに実行にうつすこと、それがいのちを守ることになるのだ。情意と認識と実践と、その統一の中に人生は正しく開展するのである。

諸君はこれから帰つて様々の書物に触れられると思うが、嘗て正岡子規は古事記の中のスサノオノミコトの泣かれ

る様を「青山を枯山なす泣き枯し、海河は悉に泣き乾しき」と形容した個所を読んだ時に、その語感にふれて「身の毛もよだつ」感じをもつたと告白している。書物を読み古典にふれる態度もかくのごとく全人格的な接触をもつてしなければならぬ。』

講師は更に聖徳太子について、太子の時代の課題が国内統一と国際的独立であつたこと、そして太子はこの問題に對しては一時的政治的な解決を求めず民族永遠の問題として対処されたこと、太子の生涯を貫ぬいた「世間虚仮、唯物是真」という御言葉は、地上のいとなみのはかなさと民族の将来への祈りに支えられていることを説かれた。最後に講師は「自由は自立へのチャンス」というアイゼンハウワーの言葉を引き、自由とは自立する意志によつて内容を与えられなければそれ自体に何の価値もない、今すべての国民が念願すべきものは民族の逞しい自立以外にはないことを強調して壇を下りた。

すべての講義は終つた。問題は出しつくされた。しかし私達はもはや別れて行かなければいけない。慌しい日程はこれ以上の時間を許さない。友情の絆は結ばれたか、混沌の思想は統一され得たか、——だがわれわれの中にはそれを問う以前に、今日を限りに別れて行くお互の胸に何か一言訴えかけてゆきたい衝動がある。かくて参加者、会員の区別を越えた全体発言の機会を約一時間ここに設けて、合宿最後の結びとしたのである。

発言の中には合宿の運営について、又国民文化研究会のあり方についての率直な批判もあつたけれども、それは顧みて他を言うごとき傍觀の言ではなく、真にわれわれ研究会の前途を思つての親切な発言であつたことが会員一同の胸を打つた。又「学校生活にない交流のよろこびを發見した」とか「国家の当面した危機をまざまざと実感することが出来た」とかいう積極的な意見もあつて深い感銘をうけたけれども、大部分の参加者の気持は「共に国の行末を心配している人々のあることを知つて心からうれしかつた」という一学生の発言に集約されるのではあるまいか。

会場全体にははりつめた真剣な空気が漲つた。困難な問題を自ら共に考えようとする処に生れるきびしい一体感こそ、現在の国民生活に最も希求されているものである。これが明確な実感として全員の胸に刻まれたことは何にもかえがたい喜びであつた。

午後、閉会式。宝辺正久氏は次の如き閉会の挨拶を行つた。

『三泊四日、寢食を共にして、ともかく皆の者が一様に感じたことは、国民生活に於いてわれわれが全情意的に体験しつづつある内容と、世上に流行している概括的議論の間には重大な距離があるということだつた。どうでもいい、部分的な問題としてでなく、そこには大切な人生の問題としておかしところがある。その一点を明らかにしようと言語合つた道程は、苦しくもあり、また未解決のまま問題を残したけれども、それにもかかわらず奮奮と安らぎがあつたとすれば、それは間接的な議論によつてでなく、全人格的に支えられたコトバを心からきき、心から語つたことによつて感じえたものであつたに違いない。『自行能ハズンバ焉ンヲ他ヲ化スルヲ得ン』という言葉がある。自らの志(求道心)を守るために合宿の経験を生かしていただきたい。友を求め古典に参ずるのは、かくして自然の情である。ここで頒布した黒上正一郎氏の著書は、当世風ではなく難解と思ふ人もあろうが、この程度の困難を克服しない何が出来よう。どうか読んでいただきたい。』

明治時代を動かした大いなる民族的エネルギーを思えば、敗戦後十二年を経た今日、自らの問題にも、国民全体の運命に関する事にも、自ら処理することを放棄したと思われる精神的萎縮は一体どうしたことか。三省したいことである。本合宿についての種々の御意見は会員でもつて充分検討させていただくことをお約束したい。国民文化研究会は同じ思いに通う諸兄もふくめて、その一人一人が相協力しながら、日本再興のための具体的な力になりたいと念ずる、そのような集りに外ならないからである。最後に諸兄の御自愛を切に祈り、祖国の自立と光栄を祈つて国歌を斉

唱してお別れしたい。』

最後に君が代を斉唱した。様々な四日に亘る体験はこの一点に凝縮され自然に胸が迫つて涙ぐむ思いであつた。戦後このような気持で国歌を歌つたことが幾度あつたらう。ここに三泊四日の激しい合宿訓練を通して実現された一つの「国民生活」がある。——この切実な実感は、今日を限りに別れゆく人々の胸に必ずや消えざる印象として生きつづけるであらう。

(山 田 輝 彦
小 柳 陽 太 郎 記)

合宿感想録(抄)

——之は合宿最終日参加者より
提出された感想の一部である——

合宿参加の悦び

下関市日新中学教諭 岡崎 博友

真夏の太陽はきらめいていた。季節風の影響を受ける宿命的
国土に台風来襲の警報を受けながら合宿地である福岡市防塁前
社会教育会館に着いた。記念すべき初日である。嵐の中に立つ
て研修の意気込みと情熱を覚える。

祖国を憂える同士の会合である。勿論私達の求めていたものは
知的欲望の満足でもなければ、自己育成の利己主義的な考え
でもなかつた。人間と人間との魂のふれあいである。

夢は四日間の生活を通じて実現された。悦びはこの上もない。

平素の日常生活を通して日本の現状はこれでよいのか。独立
日本としての真の姿を生み出さなければと祖国を憂える気持で
一杯であったが、この合宿が何か方向を与えてくれたようであ
る。心のくもりを晴らしてくれた感じがする。真実をぶちまけ
て語りつくした日々の生活に、あふれるような人間的悦びを感

ずる。これといつて具体的にとりあげて説明する克明な收穫は
持たないが、筆舌で表現することの出来ない柔らかな精神的満
足を与えてくれた。

講師先生を始め、各幹部諸士の熱心なる講義や膝を交えての
討論が益々心の生長を深めてくれたことに深く感謝する。明日
の日本を築いていくための強い確信を与えてくれた。自信を持
つて前進することが出来るだろう。

われわれは日本開拓の強い文明の戦士として正義のために前
進を続けなければならない。同志百名の努力はやがて輝かしい
日本を築いてゆくであろう。

生涯の指針として

熊本大学三年 S

手に負えないから引込むという考えに一大鉄槌を喰つたこと
は、この会に参加して得た收穫の一つであります。先ず充実し
た生活への出発の合図を鳴らした三日間でした。特に小田村、
南波先生のお話は今からの生き方の支え、指針となりましょ
う。迷い迷うことは、そう簡単に私の中から消えるとは思いま
せんが、その度毎にふるい立つことが出来そうに勇気渾く思ひ
ます。

先輩方のへり下つた態度から受けた感じも頭下る思いです。
問題は日々に大小を問わずおとすれましよう。しかし、自分
自身の中にとじこもつてしまわない立場をはつきり教えられた

ことは私の基本的な生活の指針としていつまでも忘れずに守つてゆきたいと思ひます。

直感のままに

福岡大学二年 I

今度初めて国民文化研究会に参加したのですが、特にこの会に参加した価値というような事を感じたまま卒直に書いてみたいと思ひます。

学校での研究討論会では、学生だけでありますので、とかく理論だけに流れ勝ちです。理論も結構です。然しその理論は、真実性を以て統一していない浅薄な理論にすぎません。しかしこの会では、学生は遠く東北から南の国鹿兒島までの日本全国の学生であり、社会人も種々様々の職業、労働者の方々の集まりでした。こうして又老人から高校生と云う広い視野の意見に接することができた事は、到底学生生活では味わうことの出来ないものでした。

又学校での講義というものは、学生は自由に自分の意見を述べざる事は出来ません。しかしこの会では学校のように只自分で勉強して自分の意見だけで整理学問化しようとする事ではなく、先生に質問し、その接觸の中から自分の意見を発見し、又自分の考えを友達と親身になつて比較検討する中に自分の進路を発見してゆくことが出来るのです。そのことを思うと真にこの会に参加した価値があつたと、嬉しくなりません。

帰省しても日々の生活の楽しさが増すのも又一入の事と思ひます。

こう書きながらも胸がいつばいになり、ただ有難うございましたと云う言葉に尽きる他はありません。

厚い壁の前で

おたふくわた株式会社勤務 渋谷 重雄

今度初めてこの研修会に出席する機会を得て本当に道を求めることの厳しさをしみじみと痛感致しました。四日間のなかなかな雲間の中で学生青年諸氏が如何に現代の危機を感じ、学問を通じてその危機をのりこえる為の努力を集中しておられるかがひしひしと感ぜられました。その姿に接しながら私達社会に出ている者も、安閑とした気持ではなく、もつと積極的に国民の将来や、人類の平和というものを日常茶飯の事柄を通じて更に広く社会的な視野に立つて実現してゆかなければならぬことを学びとりました。

又この会を通じて如何に現実に対してゆくかという一つの指針というものを得ましたが、私達会社に働く者にとつては純学問的な、経済的な面ではそれがどんなに普遍性をもつていて思つていても、一度企業組織の中にはいつていつた場合、如何に現実の厚い厚い壁にぶちあたるかという事を痛感する次第です。

例えば私達勤労者サラリーマンは色んな考えをもつていても

企業組織の中では「我」というものがあまりにも無視されて、本当に自分が考えていることも経営者、企業運営の上部の人達に通じる面があまりにも少いのです。その様に自己を充分に主張出来ない組織の中に一応甘んじなければいけないという矛盾を考えてみた時、私達がこの国民文化研究会で学び思索し努力することによつて、ささやかながら我が身のものとなしつづあるこの生き方というものがいつつまでも社会の厚い壁にはねかえされ進展しないように考えられて仕方ありません。

しかしそうであればある程我々はこの社会に敵存する厚い壁を打ち抜いて、人類の平和を勝ちとる為に一層この会を有意義な会として広く社会に呼びかけ、しっかりと地についた構想のもとに、有機的に手を取りあいながら努力精進していかなければいけないと考えます。こうすることによつて社会の矛盾は少しずつでもはらいのけることが出来るのではないでしようか。

合宿で得たもの

若松高校三年 N

一、講義の内容に関して共鳴したり理解することは出来なかつたが現代の危機感だけは感じとつた。自分が合宿以前に感じていた危機感はまだ本能的に人間自身に対する漠然とした危機感だつたといえるがそれが学問的分析によつて解かれてゆく中に我々は実に様々な面において危機に直面しているのだということをはんとくに反省させられた。

しかし僕はマルクスが誤つているといつても、実際に共産主義を勉強してはいないので、講師が云つたことをそのまま鵜呑みしようとは思わない。いずれ自分の手で共産主義を研究してはつきりと自分に納得させたいと思う。だがその場合の研究の仕方が如何に大切で、好い加減には出来ないかということだけはつきり分かつた。

二、人と人との間に何の隔てなく心から話し合え、互に真の親しみを感じられるというのは自分のかぎりない憧れであるが、やはりこの合宿に於いても満ちたりた味はなかなか身にしみこんでこなかつた。もつとも自分のように自分というものに信用のおけない者にそのような喜びはすぐにはめぐつてこないのかもしれないが、この合宿を契機として何か人と人との云い知れぬつながりをもちたいと切に願う様になつたのは大きな収穫だ。「皆んないい人なのだ」これがこの合宿で得た漠然とした感触だ。会員の先生方に対してはただ一言
—勉強したくなつた—

合宿を終えて

鹿児島大学二年 N

第一日目の講義を聞いて最初私は私の持つていた期待を裏切られた感じがしました。というのは私がこの合宿に参加する気になつたのは、色んな人々が集まつて話し合う事とか、又漠然とした合宿の雰囲気とかにもたしかに魅力はありましたが、や

はり何かの知識を得たいという事に重きをおいていたのです。

従つて求めている知識を満たしてくれないという不満がどうしても心から消えなかつたのです。ところが日を重ねるにしたがつて、この合宿というものが、知識を求める為のものではなくて、個人個人が自己をうちあけて話し合うことにより、お互に考えあうのだという事が分つてきたような気がします。

今迄私には真に語り合える友がなかつたので一人でものを考え、それを記録し、再検討することにより自分の道を求めてきました。合宿が終つた今、考えてみると独断的な考えの誤り易さ、又危険さが身にしみて、やはりいろいろの疑問は誰かと語り合うことによつて、よりよき方向に解決すべきだという事がしみじみとわかつてきました。

今、この合宿をふりかえつてみますと高い山に登ることに似ていると思います。山に登つたからといつて何等實際的な表面的なものを得べきものがない、しかし多くの人が汗水たらして登山する。途中きつくて、こんなきつい事なら二度と来るべきでないと思ひながら考えるでしょうが、その頂上につくや、きつさは消えてしまい、何かしら山に登る事の素晴らしさを感じる様に、この合宿はきついものであり二度と来るべきところではないと思ふことがその途中にはありますが、一旦終つてみるとやはり何かしら合宿のすばらしさが身にしみて、わずか四日間であつたのが残念な気がします。

この合宿をほんやり考えてみて何か心の底に残るものがあるような気がして、私の将来というものが、合宿参加により大き

く開けて来た様に思えます。

最後にこの会が益々盛大にならん事を希望します。

参加者よりの手紙

八代市松高小学校教諭 久住 明

始めて合宿研修会に参加させて頂き、わずか三泊四日の研修ではありましたが、ひざを交えてじっくり語り合い、日頃のなやみを少しでも解決出来た事を喜んで居ります。

学窓を出て、教職に身を奉じて以来七年、その間色々の移り変りがありました。現在の吾々の身を顧み、本当の日本の姿、自分達がやつて居る事が如何なる事になるか余りに知らなさをすぎる事を痛感し、順応主義、一部の幹部のするがままにまかせきりの状態が、どんなに危険な事であるか、痛感せずには居れません。一人一人の協力が深くおし進められおしひろげられてこそ、真の日本の建設が出来るものと存じます、又吾々はそのように努力すべきだと存じます。

研究会の今後の御発展を心から祈ります。

※

福岡県吉田春乃

その後お元気でいらつしやいますか。お忙しい中からお便りいただきまして、有難うございました。研修会の前後、その期間には申すに及ばず先生には別してお世話様になりまして、ほんとおかげを蒙りました。遅れましたけれど厚く御礼申し上げます。

合宿について何か短いものでも書いてと存じましたが、只今小学校の教科教種類につき、意見書を提出する予定で準備を急いでおりますので、この度は歌で御かんべん下さいませ。

九日から朝倉郡志波村の山の家（K様所有）ラジオの無い、時計のない静寂なところで想を練っております。虫の音が降るように聞えてまいります、勝手なものでこれはあまり苦にもなりません。

事務の係のお二人には、また大変御迷惑をおかけしております。失礼ながらよろしく御伝へ下さいませ。どうぞ御機嫌よろしう。

九月十三日

研修会につらなりて感あり

聖なるまとい幸あれやわれ今日も亦若人に伍しみ教聴くも
媮おろなわれ生くるかいあり国憂う先師に侍して魂ソセ濯そそぎぬる

その昔蒙古の大軍いくさばか屠りたる潮踏み立てば思い深しも

この渚この潮ぞとそのかみの雄叫び想い翌跡に立つ

身にぞ浸めあだ跡屠りつるこの磯は寄せ返す潮も光る礫石も

若人の息吹きとどろに松籟も潮も和し寄る撃滅の歌

身に積つもる老も忘れて若人の雄叫び聞けば胸躍るかも

混濁の闢破はするは誰ぞ松籟をほのほの染むる曙あけの若人

且つ談り且つはうたえる若人の昂れるまみに明日の世を想う

姿なき敵あだをも遂に碎かんは正気世を搏つ若人の魂

訣別の声々耳に咄まりてかえりみしけり研修の会場

師よ 幸まきくみ国負うべき若人に光掲げませいやとことわに

昭和三十二年八月二十三日

※

福岡県国武万春生

合宿の申し込み書を前にして昨年こぞをしぬびつ今を考ふ

百道にも久しく行かず今年にも百道の宿に友等とまみゆか

山に居て草まけの顔気にしつとお話聞く日を楽しみいそしむ

霧島の合宿にもまし白妙の百道の浜に集へはらから
後廿日無事にすごして集ひ合ひ若人の声きかまほしけれ

七・三一

台風のまつただなかにある思ひも友の待てばと家をあとにす

トラックゆ又トラックゆバスに乗り心急げど車はしらず
やうやくに福岡つけば友ははや一人来りて待ち待ちてありき
おわびしつ二度バスにうちのかりて西新着けば松原の見ゆ
風に吹かれ松原行けば電柱に宿舎の案内あり心にぎあふ

八・二〇

潑刺と元氣あふるる若人の歌声きけば涙にじみく
堂をゆるがず歌々果しなく若人嬉嬉と歌歌ふかな

主催者のかなしき願ひいつしらず集ひし人の心にとけ合ふ
新しき祖国のいぶき白妙の百道の宿にみる心地する

八・二二

ぼた山の傾斜なだらに海をへだて立ち立つ姿なつかしみ見る
打ちよする汀に遊ぶ児の二人その兄ならむ海に泳げり
体操を終へたる若人朝日あび海に向ひて静かにぞ立つ
四日の集ひ今日に終ると海みれば博多の海の吾が心引く

八・二三

○
思うことがどうしても表わせません。色々とお世話様でござ
いました。御大切にこの後もよろしくお願い致します。九月一
日からようやく山にまいりました。

山にて

草を刈り鎌をとがむと土に座せば下つ鳥舎ぬちはや陽かけりぬ
胸毛立て顔つき合はせにらみ合ひ飛びかからむず鷄の勇まし
外の鷄は目つむり首まげ横をむき止り木の上静かに並べり

ことりととの首無き鳥舎ぬち牽制の争ひもありてひな鷄となるか

※

九・五

長崎大学一年

T

拜啓、慇々九月ともなれば朝夕はめつきり涼しくなりました。その後先生には御変りもございませんか、御伺い申し上げます。昨日で僕のアルバイトもおわり、今日は久しぶりで落ちついたきもちで机に向いこの手紙を書いています。

落ちついて考えて見るとやはり僕の夏休みを意味あるものとしたのは先生方とともに心を開いてはなしあつたことだと思えます。僕は合宿の感想をはつきりと言葉で言い表すことができませんが、本当にすばらしく、本当に意味ある会であつたということは合宿のとき書いてきましたし、今も僕の念頭にこびりついてはなれません。しかしあの合宿はこれこれこういうものでこんな所が素晴らしい、こんな所が自分のためになり、こんな所は改めるべきだ等とはつきり線を引くこともできませんし、今の僕にはそのようなまとまつたものとして受けとれませんが。

書店にはいつでも兄貴の家に行つても、今まで全く興味をもてなかつた本に眼が開けたような気がします。聖徳太子や岡倉天心やそのほかの色々の古典文学の書にこれ程心を引かれるようなことはいまだかつてありませんでした。あの合宿から得た、勉強へのはつきりと具体化されたものではないが、新しい

強いきもちが僕を本から本へとかり立てていきます。

その点、僕には背骨が一本ふえたような感じがします。だから今からはドシドシ本を読んで肉をつけ、色々の場合にあたつて考え、つい考えもしないで無意味に過し勝な日常の小さなことでも新しいきもちで考えなおしていきたいと思ひます。

どうも僕のまずい文章では僕の今のきもちを言い表わせそうにありません。

僕等は氣の合つたもの同志で英語の輪読会を毎週一回ひらいています。会員といつても三人ですが、僕等の語学の力では読むといつても小説位しか読めずなにかもの足りなさを感じていました。それが今度は僕の入れ智慮もあつて古典があるいは何か思想的なものを読んで見ようということになりました。思想的なものといつても平易なものでないは無理でしょうから、今皆で読みたい本をあさつているところです。色々と分らないことがあると思ひますのでそのときはドシドシ先生の意見を伺う

つもりです。

また今は頭の整理と本を読むことに一生懸命です。

S君をはじめ同じ班の多くの立派な友達をもつて幸です。今から諸兄にも手紙をドンドン書いて紙の上で心を開いてフランクなきもちではなしあいたいと思つています。何だか妙なわけの分らぬ手紙になつてしまいましたが僕の才能ではこれだけ書くのにひと苦労します。

秋風が吹いてくるとたんに御飯がうまくなりました。

食い過ぎで腹をこわすのが僕の悪いくせですから今から注意のし続けです。僕も先生もあまり肥つた方ではありませんから今年の秋はT先生位に肥りましょう。

では暮々も御身体を大切に、又御便りします。

T

Y先生

参加学生、青年に訴う

現代とことさら強調しなくても、否本当に何時の時代に於いても、私達人間にとつて先ずぶちあたる問題は、その人自身の私的公的にわたる具体的な日常生活の中に起るものもろの問題であるはずです。したがつてその人にもしその人自身の思想というものがあるとするならば、それは必ずその人自身の全生活、全体験の中から結実されたものに他ならぬと思います。そう考えた場合、私達は果して本当に真実の思想というものを持つているかどうか、反省したくなります。マスコミの極度に發達した今日の社会に於いて、しかもその上国家権力集中の時代、つまり政治優先の現代社会に於いては、ずるく安易に便利に要領よく生きようと思えば、いつでもたやすく、しかも結構幸福に生きられます。又私自身反省してみても、自分は主観的に非常に深刻に思索し、なやんだつもりでいても、それは結局自分の弱い心情におぼれての自慰の気持からであつたり、或いはある概念、主義（イデオロギー）にとらわれて自分自身、身動きならぬ破目に陥るということが屢々あることを否定し得ません。その都度思うのです。思うだけでは駄目だ、実際にぶち当つて見よ、と。事実、体験ということばは、見て感じて考えて、そして実際に自分自身が体当りしてみても、そこにはじめて心に味わわれるものがある。その心に味わわれるものを私達は体験とよんでいるのです。

二日目の班別討論のときでしたか、人間の直接経験による実感こそその人にとつて唯一の真実なるものであり、尊いものであると南波氏がいわれたことを私は今思い出します。又F君でしたか、ゼネレーションの問題で「先生方には先生方の体験がある。われわれにはわれわれの戦後の体験がある」という意味のことを發言されました。確かにそうです。又そうあるのが当然です。しかしそれなら若き学生諸君の真実の体験とは何か、問題はそこから又新しく發展してゆかなければなりません。今の日本にとつて一番不幸なことは、歴史の断層だと私は思います。つながるものがないということです。S兄だつたと思いますが「先生のお話をきいているとあまりにも戦時中にわれわれが聞か

れたこととよく似ていて心とまどう氣持がする」といわれました。それを聞いた隣間私はドキッとしました。そしてそのことについて本当にじっくり話し合いたいと思いました。今私がいえることは、私共が戦時中使つていた言葉の概念（忠義、孝行、愛国など）の中にどのような内容、どのような氣持ちをこめていつていたかということですか。つまり戦時中他人はいざしらず、自分は何を念じ、何を意図して生き抜いて来たかということです。それをしも戦後の今、根本から否定し、疑うようであつたら、一体私共が生きているということは何なのかという根本問題にぶつつからざるを得ません。宮本武蔵の言葉の中に「我事に於て後悔せず」というのがありますが、それ程までの氣魄充實した真摯な全人格的修業或いはその生き方というものに深く心うたれるのです。

ともあれ私は、今度の合宿をかえりみて、私自身の今迄の精神生活を反省して、まだまだ私の実生活と私の思想には距離があつたこと、いわゆる理論だおれになる恐れがあること、体験をぬきにした理論は結局空転し、眞実の理論にはなり得ぬことをしみじみと思うのです。そして南波氏が最終日の話の中にいわれた「今後私達は心のびやかに心豊かに進もう」という言葉の中に、私には私の具体的な私的公的日常生活の中に起るもろもろの問題を一つ一つ心こめて考え味わい、話し味わい歩みつつけてゆけば、この世に於いてこわいもの、おそろしいものは何一つないのだ、否その道は必ず隣人の生活の中に、国民生活の中に、ひいては人類生活の巨歩の中にとけこむことが出来るのだという深い感銘と、ほのぼのとした生きがいというものを感ずることが出来たのです。

K 君へ

末次祐司

八月に合宿を終え、貴兄と別れてから早や一カ月、その後御無沙汰致しておりますがお変りなきことと拝察致します。

朝夕めつきり涼しくなつてまいりましたが、一日の仕事に疲れ、机に向い、ふと過ぎし合宿の事を思うとき、貴兄のことが先ず偲ばれます。

合宿の時はほんとお疲れになられたことでしょう。又始めてのこの研修会に最初は驚かれたことと思います。貴兄が合宿に参加された動機を「飽き足りない学園生活に不満を覚え、自分の生命を満足すべく、心の糧を求めて参加した。」と率直にひたむきな求めて止まぬ心情を吐露されたときは、深く私の心を打ちました。戦に敗れて後、生きゆくすべを失つた国民は、身も魂も奪われて虚脱の世にさまよい、肉身相咬み、同胞相争つて、奈落の底に沈み、救うすべなき状態でありました。その後立ち直つたとはいえ、荒んだ現状にあつて真剣に自分の生きるべき道を求めておられる態度には崇高なものを感じました。

自分の心を満し得ない空虚な日々の生活には窒息を感じしめられます。しかしながら尙もそれにもかかわらず、私は戦後のみだれたこの暗黒に似た世界——ドン底の暗闇の世界にこそ、真実の光が輝き生命の泉の湧き来たるのを感じるのがあります。自分一人のはからいの方では如何とも仕様がなことを悟つたとき始めて神の力（仏の力）すなわち永久の魂にふれるものではないでしょうか。キリストの神の心に通う者は、自己の罪多き醜き姿を自覚し、一切を放下して神に捧げ尽くした人であり、日本人の自覚に真の自己を呼びさましめられる者は、暗黒な祖国の現状の中

であえぎながらも日本の悠久生命を信じ、それに自己を捧げ尽くした人ではないでしょうか。自己の立つべき抛り処を失つて迷える羊の姿こそ今の日本国民の姿のように覚えます。すべての者が自己の生命を滅し、国家を滅さんとしてつあるのが現状でありましょう。現在我が国では「個人の人格の完成と社会に役立つ人間の養成」を教育の目標と致していますが、果して人間の完成が可能でありましょうか。又祖国を愛し、国家に役立つ人間を何故目標にしないのでしょうか。当然私達を生み育くんだ祖国日本は、日本を愛して止まぬ人物を求めている筈です。祖国の柱となる人物こそ教育の目標であり、その人にして始めて、すべての人、社会の人、世界の人類を愛し得る人物であると確信致します。単なる個人人格の完成は、狭い枠内の自己の完成であり、他と交渉のない冷たい世界なのであります。そこにはお互同胞との血のつながりに、温い愛情を覚える情意の世界は求められないのであります。共に歎び、共に憂い、共に虚心に語り合う実人生こそわれわれの求めて止まないものではないでしょうか。お互微力なる凡人のままに助けあい、睦みあつて手を取り進むことこそわれらの道と感ぜしめられます。

唯物物的の観方に深く根ざし、人間と人間とが対立しあつている現状、又反面大衆に迎合した愚さの故に墮落しつつある現状は到底坐視するには忍びません。祖国を忘れ、サタンに身も魂も売りつくしつつあるのが、青年男女の姿です。一日も一刻も早く、祖国の魂は日本人の手に奪回されねばなりません。そして青年に希望と生き甲斐を見出すようにせねばなりません。今こそ同胞一人一人が真剣に目覚め、生きてゆかねばならぬ瞬間なのであります。貴兄が合宿最後の感想に陳べられた如くに、「謙虚に日本文化の伝統をひもとき、正しき学問の道を求める」という決意を新たに想起せしめらるるのであります。

次第に秋も深まり、やがて厳しい冬が訪れてまいるでしょう。われわれの前途にも酷寒の厳しさにも似た試練がおそい来ることと思ひます。共に学びの道に歩む者として、一燈を灯して暗闇を照しつつ必ずや御祖の神の守護を信じつつ祖国悠久の生命を求め、且つ護持しつつ共に相携えて進んでまいりましょう。切に今後一層の御奮闘をお祈り致します。

宝 辺 正 久

お疲れはとれましたか。お元気でお過しのことと存じます。三泊四日という短い間にいろいろのことを語りあつたものです。いろいろのことをお感じになつたと思います。人それぞれの生き方、その思想に独特のカゲと曲折をもちながら、新しい生活に立ち向うわけですが、あの苦しい思いもあり、歎びもあつた合宿の記憶とどうか経験といふか、ひとしくわかちあつた経験的事実はいいかげんのものではなかつたので、私にはいつまでも諸兄の苦慮と求めようとするその意欲が生々しいことばと共に忘れられないでしょう。最後の日に書かれた諸兄の手記をうれしく拝見しながら、もう一度いろいろのことを整理する気持で、二、三感想を書いてお送りしたく思つたのも、言いがたくなつかしく思われるからという以外にありません。一緒に考えてみましょう。

共産主義に対する批判に偏つているという二、三の御意見はいろいろな問題を含んでいるので最初に申し上げますが、合宿のすすめ方としてはそれに対してイデオロギーの論理的矛盾を指摘して批判しようとしていたり、又所謂両陣営を平等にとりあげて歴史的解説的に明らかにしようとする意図は始めからなかつた訳で、むしろ共産主義を含めて一般に概念を先にたてて事実を見る態度、動き揺ぐ現実の中で祖国の自立、個人の自律を追い求めようとする意志を大事にもちつけようとはしないで、既成の、或いは宣伝的な概念に屈服するにいたつた劣弱性を終始問題としたこととお判りのはずと思います。そのような風潮を戦後共産主義的ドグマのまんえんの流行が代表しているのはかくれもない事実ですし、なお又戦後東洋諸地域の植民地羈絆の脱却、共産主義政權の確立など激動する東亜の風雲から共産主義を問題とするのは当然でありましょう。即ちわれわれはわれわれの生き方、祖国の命運を思つて、共産主義を固定したイデオロギーとしてでなく喫緊の思想問題としてとりあげた訳であります。

歴史とか現実に関するどんなプログラムもそれによりかかろうとする時は、眞の創造的自律的意欲とは無縁ではあ

るまいか。われわれにとつてかけがえもなく大切なものはこの意欲なのですが、合宿を終えた今、私は次のようなことを痛切に思うのです。

この合宿を通じて或る種の衝撃―勉強しなければならぬ！ という感じをうけられた方がたくさんおられた筈だ。最終日の手記を拝見しても大部分の方がそうだったと信じられます。思うに個人の思想的展開にはいろいろ段階があるけれども、その段階を画するものはいつもあるような衝撃、驚異、感激ではなからうか。世の中の人が独立といひ、平和といひ、人類の理想といひ、民主主義というが、内心に覚える痛感的不満、実感の内容を、そのようなブリガタイことば―概念で整理してしまつて、実際には思想的に無力、無内容化しつつある時、このように固定観念の無意味を気付くことは大変な衝撃です。この衝撃を大事にしたい！ その緊張を持続したい！ よくよく思つてみれば自分の内にあるなものとも知れぬものから衝迫されて勉強したいという意欲がおこる。世の中の通念がこわれ、自分もそれに何んということもなく頼つて安心していた、そんなものは崩れ、そこに現われてくる自分の痛切な実感だけが頼りになる。それは心的な緊張感というものでしょうか。知識をみだし論理的に統一したいという欲望以上の、いわば全人間的な求道心といひましょうか。それはいろいろのイデオロギーを比較考量して論理的に矛盾のないものを自己構成しようとして、一人で考える世界とは本質的にちがうのです。

本来、思想といひ、コトバといひ、共通の経験的内容を基としてゐるはずなのに、今日の日本では―世界的にそうなのだが―一つのコトバに完全に異質のないくつもの内容がもたされている。これはおかしい、これこそ悲惨な分裂といわないうで何んであろう。かかる分裂を統一して精神の本源に関する共通の憂いと、どうして祖国をこの悲惨から守るかという共通の意欲、「協力の世界」がこの合宿に於いて開かれようとした。この「友情」の世界は必ずや国といひ、同胞という、そのよつてたつ緊密な紐帯感に拮がる筈です。だが持続したいと思つた緊張感は、生理的にもゆるやかにゆるんでくるものです。そうした自然な生活のリズムの中でこそ心と心が理解し合ひ、通ひ合う友情の世界が

維持され、そこにこそ無理のない緊張的な求道心が維持されるのだと信じます。合宿で感じられた衝撃を追つて考えてきたのですが、どうかその發心を大事にして下さるよう祈ります。

私共が国民文化研究会をつくり、合宿を行つてきたのも、そのような友情——国民的同胞感につながる友情を求めたいという衝動と、そのことが文化的伝統を保守して今日祖国の独立と新しい發展を期するための現実的基盤だという確信があつてのことでありました。何故なら、合宿中いろいろ分析され告白されたような今日の日本の虚仮コウケ（イツワリ多シ——概念、ドグマへの屈服と不滿追求の扮飾、要するに劣弱の一語につきる）を感じて、それを感ずる同じ心を求めようとする願求こそは、その当時は勿論、末代にわたつて眞實を照し遺そうと苦闘した先人先賢の業績、遺志を仰ぎ顧みたい欲求と一つものになるからです。

合宿がすんでそれぞれの生活にかえるというのは、各人の仕事に一途になることでしよう。会社官庁の職務にしても商売にしても、学生諸君の学ばれるそれぞれ専門化した学問でさえも、大切と思う反面、煩わしいと思うこともあり、他を顧みるいとまもとかくなくなり勝ちですが、仕事に一途でありながら、しかも尙、祖国と同胞の命運に関心をもちつつづけることはあたり前のことでしかありませんまい。ほんとうの意味でそうあるべき、あたり前の生き方を堂々と進みたいと思うのです。先程申しのべた先人の遺志を仰ぎ顧みる——古典に学ぶことはその際の力の源泉としてかくべからざるものとなるでしょう。

合宿中おすすめた「黒上先生」のものは、敗戦後の日本と直接する昭和の初期に苦闘した著者が、今から一三〇〇年前大陸の異質文明との接触交流の時期に祖国の内部崩壊に直面しつつ、自律の信を方代にわたつて照示された聖徳太子の御遺業を、著者の生きた時代のために（西洋の近代文明との交流の課題が今後数百年国民的苦闘を要求しつつけるだろうという明確な予想の下に）明らかにしようとした国民的信の体験的告白研究の書なのであります。私共は学生時代からこの書物をひもどきながら今の時代に、又わが身にひきくらべて感想を語りあい、この書に引用さ

れている（太子のほかにも）記紀、万葉、親鸞、山鹿素行、明治天皇などの原典にさかのぼつて研究しあつてきたのですが、これこそが私共の豊かでありながら、きびしい友情の絆、生の実感の支えであつたのです。この書にとかれて「信」は民族的理想ともいえましようが、理想というほどに彼岸的なものでなく、もつと身近い緊張感に誘われます。平和といい、正義というも、その内容はこのような緊張した動乱的な人生觀を基としなければなるまいかと思われまます。

古典に学ぶとは生きたことばにふれることです。煩わしいと、時に思ふ生活の中で、国を思うことは、しかしながら決して特別のことでない、あたり前の人情だと申しましたが、その人情を失うまいとすれば、生きた一つのことばでいい、國民の精神生活が自分でつくつたことばに自からゴマ化されている——己れ自身もそうではないか——と氣付かせる一つのことばを古典に求めようとするのも自然のなりゆきです。そういう意味で「学べ」ということ、それはお互いがこれからいつまでもなすべき第一の事ではありますまいか。（生活の繁忙の中では共同の読み合わせなどが大いに有効でしょう）「黒上先生」のものだけをといつては勿論ない。先賢のコトバを味わうための入門書としても最適だろうと思うし、私共の体験として自信を以ておすすぬ出るので殊にこの書について申述べました。

合宿で何を感じとられたであろうか。そのことから、ではこれからどうしたらいいのかについて書いてみたつもりですが、必ずしも具体的な一つ一つの指針ではないようです。新しく感じられたこと、考えられたこと、動かされたことなどお寄せ下さつたら必ず御返事しましょう。友よ、一人でいる時は友を思いたまえ。祖国の偉大なる内からの勝利を、力をあわせて得たいと祈り願つている友がそこにいる。やわらかい緊密な情意的結合を成就しながら、力をあわせて対処すべき方途がいくらかでもあるように思えます。ではお元気で。

昭和三十三年十月二十日

頒布価格 五〇円

発行所

熊本市池田町九九九

国民文化研究会

(振替熊本三一九九)

印刷所

福岡市長浜町四ノ一三

大宮印刷株式会社

電話④一五二九番





